

研究者かつ臨床家をめざして

東京成徳大学応用心理学部福祉心理学科准教授

加地雄一 (かじ ゆういち)

現職に就く前、2010年に勤めていた国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所(精研)では知的障害研究部の流動研究員(任期つき非常勤職員)として、主に発達性読み書き障害(DD)児の漢字学習の研究と、発達障害児の心理アセスメントなどの臨床活動を行いました。

研究としては、障害がDD単独の子どもと注意欠陥/多動性障害(ADHD)を併発している子どもにおける漢字の書き誤りについて、音韻エラー(例:点才[天才])、意味エラー(例:心い出[思い出])、形態エラー(例:刀もち[力もち])、特定不能の四つに分類して比較検討を行いました。その結果、①両群に共通して形態エラーが多い、②ADHD併発群では漢字の画数と正答率に負の相関がみられ、画数の多い漢字で空欄率が高い、ということがわかりました。これらの結果から、漢字の読みや意味を教えるのと同様に(あるいはそれ以上に)、DD児には形態のボキャブラリーを増やす介入が重要であると考えられます。また、ADHDを併発している子どもは画数の多い漢字に対して回答をあきらめる(空欄にしてしまう)傾向があるため、DD単独の子どもよりもさらなる介入が必要であることも示唆されます。一見当たり前の結果に思えますが、このような地道な実験や調査を重ねていくことで、発達障害の

病態解明や介入方法についての研究が進められています。

臨床活動としては、同じ施設内にある病院の小児神経科を受診した子どもを対象に、発達障害に関する心理検査(知能検査、発達検査、神経心理学的検査など)の実施等を行いました。検査結果は、診断や処遇、子どもの保護者へのフィードバックのため、研究部で行われる心理検討会で報告、議論されます。私が書いた所見がそのままの形で保護者に渡されることもあり、臨床に伴う責任の重さを実感しました。最初のうちは検査に不慣れだったので、先輩が行う検査を陪席したり、自分が行う検査に同席してもらったりしていました。検査を受ける子どもの中には、検査中に立ち歩いたり、関係のないおしゃべりをしはじめる子どもも少なくなく、なかなかマニュアルどおりに検査を実施することが難しかったので、検査を陪席した(同席してもらった)経験が、その後の検査にとっても活きました。所見の書き方についても具体的かつ丁寧に指導してもらい、精研では先輩に育てられながら臨床経験を積むことができたと思います。

他に、研究部が行っている研究

Profile — 加地雄一

2007年北海道大学大学院博士後期課程修了。高齢・障害者雇用支援機構研究協力員、国立精神・神経医療研究センター流動研究員、青山学院大学助教を経て2011年より現職。博士(文学)。臨床心理士。



脳波を計測するために頭部に電極を装着したところ

の補助要員として、脳波測定や近赤外線分光法による脳血流測定にも携わりました。「アミグダラ」などの脳の部位に関する名称が英語で日常的に飛び交っていたのですが、精研に入るまで私は主に行動データしか取り扱ってこなかったもので、最初は英語の名称が脳のどの部位を表しているのかがすぐにはわからず、勉強不足を痛感させられました(おわかりかとは思いますが、アミグダラは扁桃体のことです)。部長が脳波の英語のテキストを定期的読み合わせてくださったこともあり、なんとか脳の機能に関する研究の話についていくことができました。

その後、精研での研究・臨床活動が評価され、常勤の職を得ることができ、今は大学で教員をしています。もともと研究も臨床も両方やりたいと思っていたので、精研ではとても充実した日々を過ごすことができました。精研の先生方に深く感謝の意を表します。